



発行 真言宗豊山派 霊松山歎喜院
金剛寺

〒371-0241 勢多郡宮城村大字苗ヶ島1147
TEL 027(283)6918 FAX 027(283)6815
<http://www.raijin.com/kongouji/>



御本尊 十一面観世音菩薩

発刊に寄せて

檀徒総代

前原直之



この記念すべき年に、金剛寺では記念事業として、開山円義上人を始めとする歴代住職墓碑、基・その他基を改修し、他寺には見られないような立派な姿に整理されました。改修整理された歴代住職墓碑などを拝見しますと、寺を建立した開山和尚の理念と信仰の精神に基づき、代々の住職と先祖の檀信徒とが一体となって、金剛寺の護寺発展に尽力され、今日に至ったことを伺い知ることが出来ます。

檀家の皆様方には、増々ご清栄のこととお慶び申し上げます。平素金剛寺の運営に際しましては、絶大なるご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

さて、この度金剛寺だより「道」を年一回発行し頒布することになりました。

平成の大改修も無事終わり、昨年は、真言宗豊山派の派祖、専譽僧正四百年と新義教学の祖、頼瑜僧正七百年御遠忌の年に当たりました。

このように、先祖の築いた立派な寺を子々孫々に継承するため、これからも、志田御住職と檀信徒とが一体となって、ますます護寺発展のため努めていかなければならないでしょう。

この度の、金剛寺だより「道」の発刊に当たり、これが広く檀信徒の皆様方に愛読され、寺の発展の一助として寄与されことを念じ、心から期待しております。

ネパールの旅から

北
爪
遊
峰

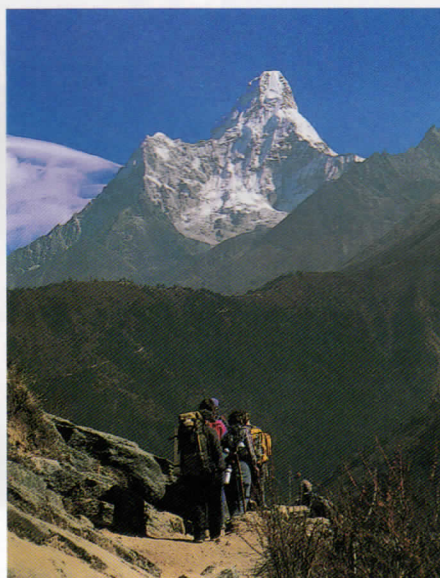


十六年前、昭和六十三年の三月、ネパールへの旅をした。勤めを辞めた今が、エベレストを見に行くチャンスだと思ったからだ。ネパールはインド北方の細長い小さな王国。世界の屋根といわれる八千メートル級の山々を北にひかえ、山と山の間は深い谷で区切られている。南は印度に接し、平野が続いている。お釈迦様は印度の人と思われているが、実はネパールのルンビニーという所でお生まれになったのである。

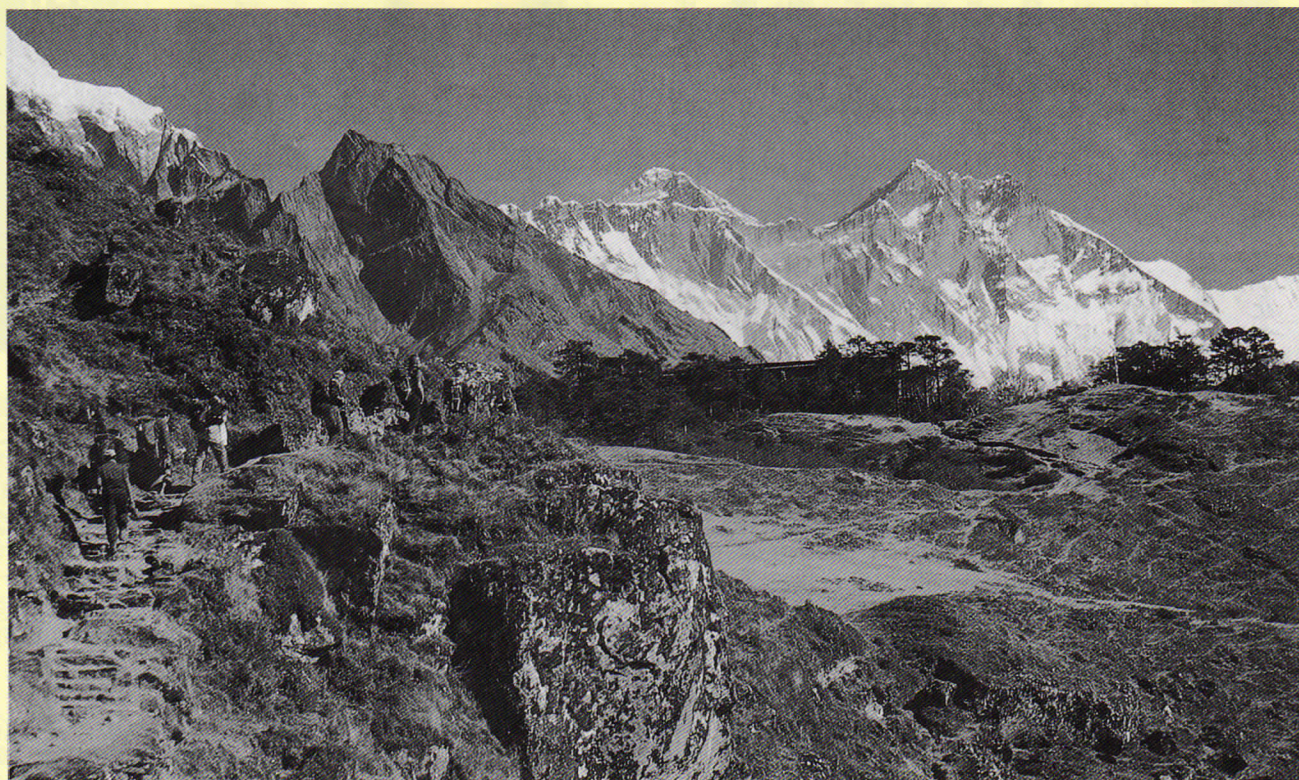
ネパールが有名になったのは戦後、エベレストを始めとする、マナスル・アンナプルナ・ダウラギリ（八八五〇m）などへの登山ブームからの



カトマンズ
ボダナート（世界最大の仏塔）



▲ネパール・ヒマラヤ、アマダブラムに見守られてトレッキング
ここを歩きました。



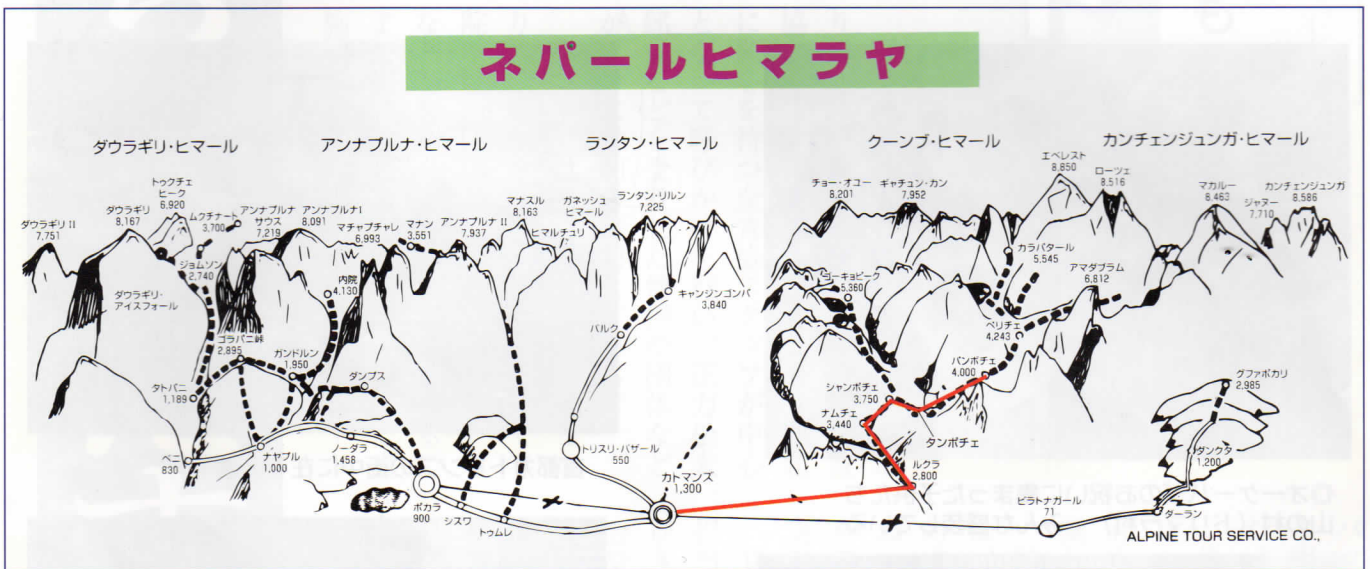
旅行会社はいい所だけを載せています。

▲シャンボチエからのエベレスト(中央)とローツェ(右)

ようだ。わたしもぜひこの目でエベレストを見たいという思いが、ネパールの旅へとかりたてた。エベレストへ登れるわけではない。トレッキングといって、憧れの世界最高峰エベレストを見るために、三千メートルから四千メートルの山道を歩くのである。

首都カトマンズから小型機でルクラ（二千八百メートル）へ行き、そこから歩き出すのである。菜の花の咲く野を歩き、麦の穂が緑にそよぐ里を過ぎ、川を渡る。川の橋は丸太を並べただけの所もある。狭い山道は足をすべらせると、百数十メートルの谷へまっさかさまだ。坂路を登りました、谷まで降りるくり返しを続けシェルパ（案内人）の里、ナムチェ（三四四〇m）の村に着く。ナムチェの丘に登ると、タムセルク・アマダブラム・ローツェ、そしてエベレストの名峰が目前に開ける。

なぜか知らず、ワーと涙があふれた。偉大なもの、美しいものに出会うと、言葉を失う。登山家が危険をおかし、苦痛と闘いながらも山に登るといふことは、体験した者ののみが知ることだ。更にそこからタンポチェ・パンポチェ（四〇〇〇m）という所まで行って帰るトレッキングで



▲ナムチェ村上部からのタムセルク



▲タンポチェからのエベレスト、ローツェ



▲クンブ山群随一の規模を誇るタンポチェ僧院



あったが、途中のタンポチエで、別のツアーの日本人、垣見一雅さん（オーケーバジ）とのすばらしい出逢いがあり、わたしはその後ネパールへ五回も行くことになったのである。



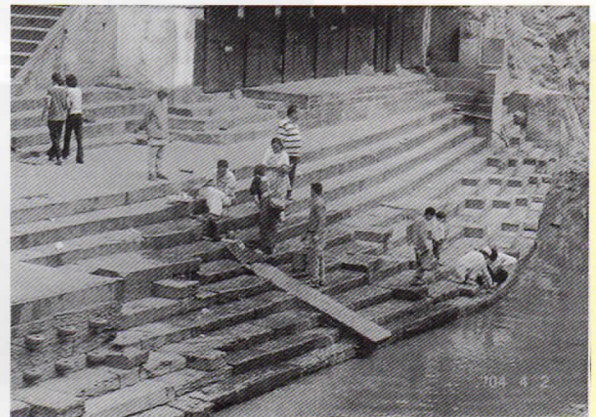
◎オーケーバジのお祝いに集まった子供たち
山の村（ドリマラ村） みんな盛装している。



首都カトマンズの街中に在る水道

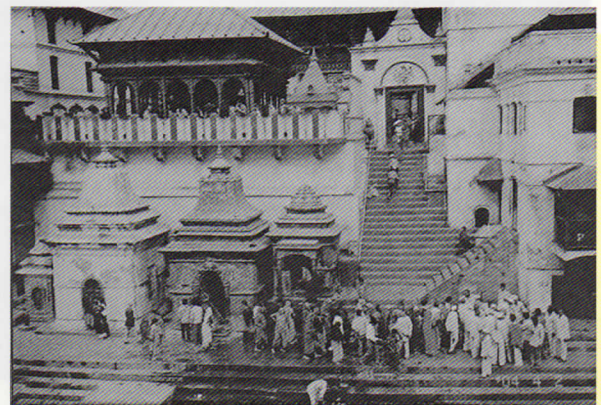


街中で客を待つリキシャ カトマンズにて



パシュパティナート ヒンドウ教の火葬場です。

ながい道も
自分の無力が
ようやく
わたりこした
ぶんかまな
歩んぞす



パシュパティナート
火葬が終わった所 遺骨は手前の川へ流します。

佛教タイムス 記事より

有志僧侶でひきこもり対策

寺院ネット設立へ

10月18日

ひきこもりや不登校などの問題に関わる超宗派の僧侶が集まり、引きこもり問題に対応する寺院ネットワークを発足することが決定。これを受けて8日、東京・築地の築地本願寺で第1回の世話人会が開催された。今回の世話人会には呼びかけ団体である全国青少年教化協議会（全青協、斎藤昭俊事務総長）の担当者をはじめ、参加を表明した僧侶や団体関係者ら約10人が参加。結成に向けての具体的な協議を行った。正式発足は10月18日となる。

同ネットは、ひきこもり問題に取り組む寺院などの要望を受けて全青協が具体化を計画。ひきこもり問題に関心を持つ全青協スタッフが中心となって呼びかけを行い、正力松太郎賞などを受賞した僧侶や団体などがすでに参加を表明している。

ネットでは主に全青協が窓口となり相談業務を展開。相談に応じて寺院や協力団体（仏教系以外のNPOなど）を紹介するシステムとなる。また相談は電話、メールを通じて実施。さらに相談内容を随時フィード

バックすることで、ノウハウの蓄積や相談員間の意識向上も目指す方針だ。

世話人会ではこれらの基本方針を初め、「ネットワークの名称」「事業計画案」などの具体案をそれぞれ協議した。

特にネットワークの名称に関しては、相談者への訴求性や、当事者に対する配慮の点から検討し、「てらねつとE.N（縁）―全国非登校・ひきこもり対応寺院ネットワーク」に決定。

具体的事業案としては、①全青協担当者による週2回の相談業務、②ひきこもり当事者、家族同士の交流会や講演会の実施、③参加寺院による研修会、協議会の定期開催、④啓蒙を目的としたリーフレットの作製や告知用HPの開設、⑤メールリングリストなどによる連絡網の整備――などの方向性が提示された。

さらに、世話人会では運営上の課

題として法律家、カウンセラーなどの専門家との協力体制の必要性も指摘され、具体的人選が話題となったほか、10月18日に行われる設立大会の企画なども検討され、シンポジウムを中心としたイベント案が検討された。

当日参加した正力賞受賞者の志田洋遠氏（真言宗豊山派金剛寺住職）は葬式仏教の風潮の中で「寺に引きこもる僧侶」が多いとし、「無関心では困る」と僧侶の現状を憂慮。さらにネットが「相談員の相談にも乗れる場になれば」と語り、期待感も示した。

なお、同ネットでは正式発足に向けて参加団体を募集中。基本的に伝統教団寺院が対象となるが、新宗教、NPO団体などに対しても協力団体として登録を受け付けている。

問い合わせは全青協（☎03-3541-6725）まで。

あやまちをただす
勇気が親の愛



第7回諸宗教者による 平和を祈る集い



日時：2004年9月11日（土）

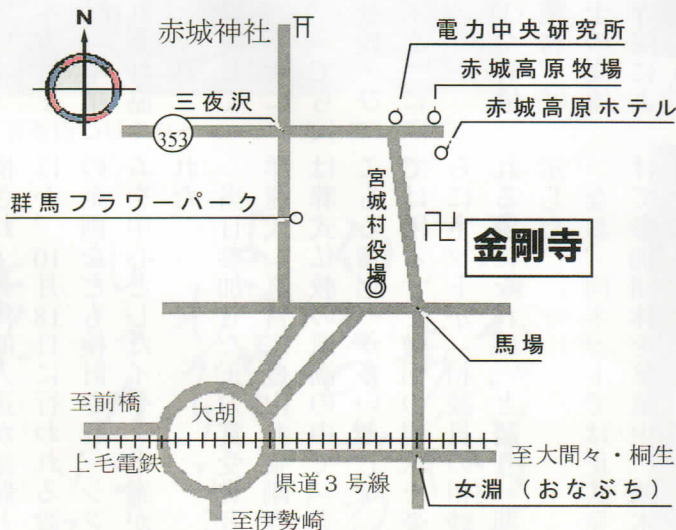
午後2：00開会

場所：真言宗 金剛寺

（勢多郡宮城村苗ヶ島）

プログラム（予定）

- 1 諸宗教者によるセレモニー
- 2 平和の祈り
- 3 講演：高薮繁子さん
「イラクの人々はいま」
- 4 交流と歓談



よびかけ

真言宗豊山派 金剛寺

天台宗 群馬教区

カトリックさいたま教区（ロバの会）

ジアメア モスク（伊勢崎）

（連絡先）

金剛寺 志田洋遠

勢多郡宮城村苗ヶ島 1148

電話 027-283-6918

諸宗教者による 平和を祈る集い



寺 唱 高
敬 晃 柳
宗 台
青 柳

諸宗教者による平和を祈る集いというのは、県内の仏教、キリスト教、神道、イスラム教など、様々な宗教者、信者が一堂に集まり、ともに手を取り合って、世界平和のために祈り、はたらきあうことを誓う集いです。会は重ねてこれまでに第6回を数えます。そして第7回目は、金剛寺様に会場をお借りすることになりました。そもそもこの集いは、アメリカで起きたかの二〇〇一年九・一一事件、そして十一月七日のアフガニスタン報復戦争のはじまりがきっかけでした。九・一一事件によって世界の歴史が大きく変わった。そうお感じになっている方も多いと思います。そして二〇〇三年三月二十日、世界中の平和を願う声を振り切って、イラク戦争が始められてしまいました。日本もついに戦後初めて戦場へ軍隊を送ることになったのですが、物事は何一つ解決せず、ますます混乱しています。私たちは人間として、宗教者として、世界の戦争への流れに歯止めをかけていかなければなりません。小泉さんが総理大臣になって、「自己責任」という言葉がやはりはじめました。株で損をしましたが、自己責任だね。会社が

倒産して失業しました、自己責任だね。何でも自己責任の一言でかたづけられてしまいます。わたしたちも、飲酒運転で免許取り消しになりました、自己責任じやなどと、軽くその言葉を使います。でもちよつと考えると、こんな矛盾した言葉はありません。人間はひとり生きていくことは出来ません。人間は社会を形成することによって、これまでの歴史をつくりてきました。しかし自己責任とは、自分ひとり生きていけ、ということなのです。人と人との関係をばらばらにしていく、そういう言葉です。しかしその言葉を好んで口にする政治家たちは、はたして自己の責任をまっとうしているのでしょうか。社会(政治)の責任を私たち個人一人一人に、さも責任があるかのように転嫁しているだけであるかのように転嫁している言葉は無責任の極致であるのです。人間には、自己に責任を果たすのではなく人々が共同して、社会的責任を果たすことが求められているのです。自己責任という言葉は、社会が無責任であることから生まれてきた言葉であると思います。いま日本国憲法すら変えられようとしています。日本がふたたび戦争が出来る国になるためです。戦争をしなくては成り立たない社会、戦争をすることによって成り立っている社会に日本はなってしまうのでしょうか。次の世代から、何でそんな社会にしてしまったんだ、なんてことをしてくれませんか。あなたと必ず指弾されるでしょう。そうならないためにも私たちは共同して戦争への道を拒み、「責任」をはたしていこうではありませんか。「諸宗教者による平和を祈る集い」がそのきっかけになればと思います。

観音信仰の聖地

豊山 長谷寺

いにしえから神々が舞い降りる地と伝承され、『万葉集』『日本書紀』に「隱国の泊瀬」とその麗しい景観を詠まれた、小初瀬山(奈良県桜井市)に真言宗豊山派の総本山長谷寺があります。

長谷寺の歴史は古く、今からおよそ一三〇〇年前の朱鳥元年(六八六)、道明上人が天武天皇のために銅板法華説相図(国宝)を西の岡に安置されたことに始まります。

のちの神龜四年(七二七)、徳道上人が聖武天皇の発願により、東の岡(現在の場所)に十一面観音菩薩像をおまつりになりました。徳道上人が西国三十三カ所観音霊場巡拝の開祖になられたことから、長谷寺は観音霊場の根本道場とよばれるようになりました。

平安時代以降、観音信仰の高まりとともにその霊験のあらたかなことが世に知られるようになり、公家から庶民まで広く信仰されることとなり、人々の観音さまによせる熱い思いは、『源氏物語』『枕草子』『更級日記』『蜻蛉日記』などに、「初瀬詣で」として語られています。とりわけ女性の参拝が多く、恋の成就を祈ったといわれています。

やがて戦国乱世が治まった天正十六年(一五八五)、観音信仰に篤い豊

臣秀長公が伽藍を復興し、専誉僧正が招かれて入山されました。これが豊山派の始まりです。

長谷寺は、山の斜面を活かした境内に、諸堂が自然と調和して点在しています。有名な牡丹は境内全域に植えられ、その数一五〇種七千株に及び、花の盛りにはたくさん参詣の人々でにぎわいます。

山門をくぐり観音堂へは、三九九段のゆるやかな石段で、これを登廊とよんでいます。

登廊を上がりきると、身の丈十メートルに余る金色の十一面観音さまが迎えてくださいます。右手に錫杖と念珠、左手に蓮華をさした水瓶をお持ちになり、石の上に立っておられます。世に長谷型観音とよばれる独得のお姿で、これは観音、地藏の徳を併せ持った慈悲の深さを顕しているといわれています。

「花のみてら」ともよばれる長谷寺、春は桜、初夏に牡丹、梅雨時の紫陽花。そして秋の紅葉、白一色の冬景色。

四季折々の、さながらこの世の浄土をしのばせるような景観は、訪れる人の目と心に安らぎを与え、ありがたい観音さまのお慈悲を感じさせずにはいません。



法話 第一話

天知る地知る我知る人知る



私達が、人の道にそむいた行動（行為）をした時、誰も見ていない知るまいと思っても天や地は知っているし、誰かは見ていたり知っている。

不正や悪事はいつかは分かってしまうものであります。

人間は常に自分にきびしく不正・悪事を犯すことなく正直、誠実に生きなければならぬ事を教える言葉です。

人は時には、うまい話や甘い誘惑に誘



われやすい生きものです。

そんな時、私達が人の道をあやまない為に又、自分自身を見失わない為に、冷静に自分自身を見る姿勢が大切なのです。

『仏教』を知るといふ事は、いかなる時でも自分を客観的に見る「もう一つの目」を養うことではないでしょうか。

編集後記

当寺では、平成十三年に金剛寺ホームページを立ち上げ、現在一万三千五百人以上の方々が、アクセスして頂いております。

特に、その中に『メール相談室』を開き多くの子供達（大人含）が相談を寄せていただいております、当ホームページが些かでも社会に役立っている事に感謝いたしております。

マスコミ等で連日の様に、青少年達が犯罪に巻き込まれたり、又起こしたりした事件が報道されております。この様な時に、当寺がホームページ開設させていただいた事は、寺（僧侶）本来の業務の一端を務めさせていただけたと思っております。今後ともなを一層の精進し悩める人達のために頑張りたいと考えておりますので御理解と御協力をお願い致します。又、この『道』発行にあたり、『金剛寺ホームページ』をご覧出来ないかたより、それに変わる物が出来ませんかとのお電話が有り、年一回ではありますが『道』（題字・福島県

竜角寺副住職鈴木克信氏）を発刊する事を決めました。

今回は創刊号として総代（前原直之氏）・特別寄稿（北爪游峰氏）天台宗（青柳晃敬氏）の方々に投稿をお願い致し、御協力をいただきました事に心より感謝申し上げます。これから檀信徒各位様・又、宗派を越えて様々な方々にご寄稿・ご投稿をいただきながら継続してまいりたいと考察しておりますので御協力と御理解を伏してお願ひ致します。

住職 記

庫裏だより

今後発刊の折に『庫裏だより』を出させて頂き、少しでもお寺の生活が見えるようにしたいと思っております。

★孫（女子）が出来ました。これでお爺さん・お婆さんになりました。

—— 感慨無量です。 ——

★先代（賢尚和尚）が十七廻忌を迎えます。

（昭和六十三年十二月三十日寂）
住職・家族（寺族）の住まいを庫裏と呼びます。